

百首異見

一一



陽成院



けくもれ書むらある三の川の川ひそひりて湯と茶わ
後撰集空三物處せみよほりきりありけくとおれ高
板うちたかくふあくとまがくまの川の川を流せば
ますてあつひよ湯となりふ風ひうり太湯風ひのほり
くとてよしゆくなりやくやくれと准すけりと友さ
湯園者言云此大師歎力もととくはめの事ならず
ものこまよ國うらみくまのとくに水とくらむとくに
やとせやゆ源とくらむとくに木中の太く木古なれ
れ道とくまけよきは事とれゆん書むりおれの

河とひそてまよ瀬の勢ひ直すものとひそまひて
もひそめらをすた湯と茶ぬりほりい甚序
わがひとなうてこ詫まへあたゆうとひそまひて湯
と底ゆくからぬゑのとせうそいだまうてよひの難
あとうんよくれいの候うて難くへむだあうもん
と水ふよせあひ意としとゑの朝ようおひすくとて後
よはすりてとひなりとひそく候ん兼捕卿乃ひとせつと
まて湯となうんのうをちを家卿乃古布とひすいは
賛せよまうてとひだやす地れのまづふとて重うりむ
うと今とたまうとひそくまよ伊勢集よはま

乃まうれ始にま雨またまうそく一候をまうあひ
兼塗集ようと候りうそきよはあす田里の浦のう
かんとまくならうそとあるゑなとまれあとまそ
ひとまとまく

○改親云羣うらゐのれのひだ書うりせうあともい
けく川の名よつまうことよつま非也こだまの川の名
はもじくよくやえうり水とひみくひとわうま重りて
中も間まうらゆ事とひとまとま事代思ひうけの
湯とれまうんよふれうらゆうなうてひとまうねうらゆ
せうれすうらゆとひとまうなうて又云謡抄よ三の川の年

とて不復波よりち砂のトとくろて川ととくす一滴
波へなれくあは川とくろきるととまちかよ美葉集
茅十四連歌ニ波波称乃伊波毛茅柿呂糸於都源
豆代尔も亥虫是尔和家於毛波奈久余ちくあま
よれを此道更してとひ初学をこねよ流ひて云或說
ニ改廢よりち沙代トとくろて一滴つて有となとつては
美葉は嘗の因井ともうふ他事の淫穢の語を取
りせせてアツツのよみんとてすりまことなりテ美葉十
四連歌すよ波波称乃伊波毛茅柿呂糸余ちくとあらう
ハ妙のトトロをとひハ推忌れずと岩をうくげり

のあれ萬事トヒア此說され非也哉以東歎乃考も
さうよ落水ともす今北之野の川と同流き不叶
ゆらだとうは嘗未だく候きまほうり乃山中未だ
トモはく乃流あんを數としとくに此美葉の波波
称乃ねをとす波を余巻の事とひとくりよりかくまと
ひを出うじては相模根白松甲斐とれなど乃ねよひと
いたむとす同一意とて必高松ととゞよひあ
す山ハ峯とすてかくへきみのうまでちをつひなぐ
也同書達歌ニ波波称余虫波可母布底面伊奈辛可
母か奈思古史若秋余勞保佑流可母ちく波波称乃尔

防具波麻欲能卷廿ニ都久波神乃佐由流能波奈能
など布はすとひ新素早百合とひるそくに高根の車
かわく大やう轡といひ此佛事の後波舟を出はく
もとつ車多く同意をきまし五ひの高根をさう
て奉とう車宣つて古今集とくとも代書のりうち
梨落すりとあられ同つて諸注言ぬ詞のりうち
は邊づかの事傳うふとすれどら後波神乃称呂金可済
義若とひ平豆久波神呂能波麻乃作志をさい
てをやつてれをあれと今ハ後波舟ふすりて弁
せり又新葉の岩もさうとひ後波舟もさう

ノモあれ落すさう早川とより三野の川とさうと
まはすとて三野の川ハ春すり傍ひゆつて原の名ふく
古君のとく吉田村下りけりれなれうと其故ハ
茅葉奉十七久波神よ久方天印等水無河障而居之神
也之恨まこと十弓麻可奈恩義佐神全和波中久可
麻久良能義志桂瀬河治金恩保義都志武賀前乃
す、天乃川いをよみそそれち水うちれいこれせ川とひ
なんじつ取まへ事はりるけりおれあら事す
あらみまの世川と云々又奉宇モ元人者死

若水瀬河下流吾渡月日異卷十一
浦福而物者不食
水無瀬川有而色水者過云物乎まへ言急者中波余
騰並水無川絶路云本平有故名湯日古今集之記
せのありて行あなくそうみをせら下ふうひくに廻せ
川行ふうそなとありてあれきほり事論なり近うを
盛衰記より高倉の宮代山城の井とれどもよりてあれ
一川よしやさんとトモセキテ清すありこれと井の川
源の吉田よりて水ねる者れまと思やりたるそ
わくふう年川よしのまゝをゆく被記より宇治より
落羽の川あすとよつらおりとゆきのくよみすと

説を信して篠波山の麓小川の川とよばれると思つてゐる。既に年々うとうとく小川も者より終く又流きぬるほどの名すて流き去りたりたまをとてとてとてあらん

河原左大臣

美らやのあひすらすり誰ゆゑよ礼き初んとせ。おまきのふ
古今集無事野スミタシノホシノするもおんとぞとありしへは伊勢物語
みちてからぬまたぬこトコトコかくらひカクラヒせよ
いつのん誰の處カタをそそんなく思ふあはわぬと
せよ下シテすり軽ハリハリとうけくよろけヨロケては聲ナメあらゆ

うり坐す乃前よ店カミヤの有よ湯ヨウやくさわく山の瀧タマませ
いづらあひはひそぞおれ初ハタハタを波ハタハタの名原ハタハタくらひんと
きのれやなとあるを皆ハタハタくびすハタハタ所ありあひ
あくひあはわすとすとぞもくとぞ興風キクフウの歌カタれ友
なとれくの所ハタハタにぞけり初ハタハタのやはまおんとのさんらの
序ハタハタの三荷田東原居の伊勢わは事ハタハタを向ハタハタまおとよ
冠ハタハタ舞ハタハタみちばのとよへ信まハタハタの那ハタハタより揚ハタハタ舞ハタハタとま
まく車ハタハタ古ハタハタは舞ハタハタをまきまハタハタとすり初ハタハタ事ハタハタ後ハタハタ
を細ハタハタ舞ハタハタて云古影ハタハタの圓名板ハタハタをすて冠ハタハタ舞ハタハタとま
其一二をとく葉葉卷ハタハタすよ石ハタハタよ零十方雨ハタハタ尔ハタハタ持ハタハタ聞ハタハタ哉ハタハタ

すらすりとそ縫ひをしたるやう小摺りと伝文もすりと
すきとすまは其傍奥よりゆくものきりあつてまは
さふねす今度のと連れてきてやすとえどい事よろ
きのとて頭痛よりまづおほき奥の先端すむち摺との
の東邊にとばれあり信夫摺の章と性善せ一事なた
まにゆきりばれき事といたゞく摺もくほせせ代
物が内摺はなむことをもてよぶる高き下りものよ
まともとく彼里があやき摺布とゆせり、鎌倉のころ
あたをもぐくと交換と取たゞしてさう新ひせよ多くは
是又同書云今之佐乃つるぎ山中よりのこあり清少納言

わくの軒より端をよ生たるおうきとひもまた
またさすにえありたりて今れまなむは候の下草
の事なれも必別也。被の草一きそろじたもの
のわくの軒をふ生ばう端を軒あらの草なんふ
つまげよもひりて今京にて軒あら或ち門裏など
すものも意よ被の草よ似たりて近世がのうかふ生る一
種乃至とあるとまくひくとてをすすりもとすれあ
ふ軒志清よよひ別て此すすまゆへやされ草
とひく志のよとひいともすとまゆかれ草よ事
ハ別よ海せりあよ煥德院のうき軒端があらとすます

きくもそれもちは軒志のよとひ事清抄よだるをも
まくち同拂書よ乱を我意まのねまくのう草を思ふ
にまわる鶴の毛衣と草の草とそくそくを被の草
の草の一葉なるかくらとぞすたまく今と轍中やう
みくはわもまく草とひの差濃日うちみくはもてす草と
そひくわくくふ雛称をふり又童子向よまくのう
とだめよと云まと移り故より付くるとす萩と擣け
けふを萩すりと云敷也とつまくとあがくまほあそ
むくきのよあくす公忠集よあんではるひあそと我
あれぬふましてとあくせうりなあくまくあらと

思ひてゐてやうて一書の西全くあはれむにあ
うきやうるをあくとさうしてあらそめうちとへくやう
てとまそお青色の深くうとあくよみれせり

○初學云他の誰人のまゝとそれら多よどいのまぶんと
やうふと相す只ならぬからとくそとくはまくと思ひ
みまくとくはれを今れんとまよとくはだんより
らんあつてをとくとまく思ひやうと意するあ
すうれの准ハありとぞそれの處をひそひそぶんや
きくそまんと思ふれなうすとほとくゆつけ
て差へるやうにうまそおとゆくふくうなとよ意ハ

左の雅歌の思ひまわんとあくへうたをうかとく
誰ゆゑよみまんと思ふとあくとやうくさんかうてあ
伊勢お便のそれ初うとうと意とくままでく祥あくま
ちゆのを又同書きゆらすま又礼品と云翁あはれ枕
草あはれ藍うとすりとくわいたま千けうま被衣よ
我んまとうとく縫は成ふうり神うり外は廢りまてと
てひく黒へ拂はる拂ひ形のもあわせてわちを乱
きて拂ふあはれ拂はる拂ふとくわ拂ふとくわ拂ふと
とくわ拂ふとくわ拂ふとくわ拂ふとくわ拂ふとく
わ拂ふとくわ拂ふとくわ拂ふとくわ拂ふとくわ

の林をとどめたりとてはまことにあらむるの林をひと
つありよ懸す語ひを用ひてまとめていふはせらうと
さまは掲げらるす何ともあらむなりはつべく
とくら掲げたるをもはれのうてがれ被ふるるをばく
せりかく掲すてたゞとくら掲げたるをなすて
たゞとくらまみのゆゑひとんじらにとめこと
とて絆されうんそろうむられそれうるをつだけ
れおりとめのゆゑり其名を傳するなりへま御室よ
りらすりと變とみてたまうにとあるは忍草など
種とさがゆきりまうるやまうとつばよくせり

すりやと海きたるととくらみはとまうり難一枕まふよ
青色のねれとぬ掲げらうしたる千徳とみのと掲
めえきれうとまきぬとまきぬすりとくらうる徳
とせくらうなどあは掲げたまうるのとおよまれ
鳥ふされとくらみとくらみとくらみとくらみと
くらみとくらみとくらみとくらみとくらみとくら
みとくらみとくらみとくらみとくらみとくらみと
くらみとくらみとくらみとくらみとくらみとくら

つゝあそゆん又被なれましはんのあそぶなとつうされ
ハ此證よりくまふあす

光孝天皇

あらあま代聖よあくわれつむ御、もとをひたすらす
古今集春と仁和の帝みことがくまくげの時の人には
れきのうち湯すとあり焉よあそんとそくすとせりす
て蒸つむ神まひすと雪代宿くふとせり今まもす
くろの湯詔なまへそと御くじてお福もじてよこたまもす
そくまむと見えぬすとゆく度ハキサキにまよこす事
論ナリとまほあらむなどあつてうらまきく後凋あるもの

也かとくひうきそ歌力とまれる同集事下小相すまろ
名も人れあらて来く解アたぢうほよとそ花ふきと
けりける貴之ひとくアスルもやうと櫻花うすを結
アシカちふちめんとあもとた花乃うてよまれうてそ
てあつうすみちとおれふきとてはうをやうとすまとよもうり
實もほりうす料ふようすとひく今ま解ア大和也慶下
あらね家貞よほす其母乃梅の花のうよ書そゆをう
あらね解アすそとゆうてまたもよ出そつらうも葉う
とあるなどた摘くのう其人(ア)もむそとよみだよれ
といふうよらであやまつ事なれどもとあれを庭うそ

時もと春の聲よ出くとよみなせむ意とハ似まふ
あは門人本下幸文云ある人共をかくて親王の湯身
とて寄らるゝとあく湯より摘みたる人小
善葉なる日と寄る湯よりてかづき御すれ
らんともいふ事也同集本下善葉のとて人よに
かづき葉平朝臣ゆきとあひくわづきとあひて
心をけらねせられまゐをあへんとせらるぬめ
とかくうるそ致乃こわすり又大和地居は監命姫のさす
かきの湯よすばゆれとせりて御くらうぬを差よすえ
はや初書を船とせんじうとやまととあれとあまむれ

のれうてやどろふ抵す善葉卷写高安玉裏翰賜娘
子欽奥幹燈邊去伊麻夜高姫音漁有原卦東翰卷廿
班國之時使高城玉流山脊園賜善妙親命姫等所致
安可祐佐瀬比流波多く婢豆奴婆多麻乃歌瀬乃伊
刀末仁都賣流荷件禮などとぞも葉ふらう沖よき
ふすれとまうりよはおへ前をむらうより拂へあ
しもひき苦勞とがまへてよあらひのとまこと葉は
すりはゆとねあす朝食夕食よねせん糸なれいおまく
さるせ代もわざみて男はすまのよねすまほ今乃其
あまふくえあへ新機善葉よ物なまくわとまはせ

あゝ豈れどもあつて詩を綿々曠野采
驢。行云春蠅採蕨。又魚囊をもわざと持つてゐる。そんと見
んとおれぬ病情也。半身も御懸念の如きで。まの勢
じを移別にまことに。常小あらず。とくとく又もるが。よこ
なく。う男根も。ゆれても。ひきよまれまと。ソリハ。あくた今
乃肺瘍。ハ。寒。よどき。葉。つまむ。なまけ。本情。と。や。て。病。ま
き。と。ア。キ。ト。モ。ト。ル。老。ト。る。賊。の。男。ク。葉。つ。む。な。と。は。あ。か。そ。よ
う。歎。あ。事。那。一。せん。や。そ。ま。す。あ。ち。を。就。生。の。湯。身
と。て。ほ。り。人。代。か。乃。葉。を。う。り。に。寒。と。そ。様。く。聖。原。と
ゆふ。ふ。う。と。く。ち。ん。や。是。と。た。ゆ。り。く。乃。海。き。く。ふ。後。う。す

など。は。ア。タ。ス。初。學。云。天。曾。れ。湯。敷。く。と。と。と。と。と。と。
擇。民。乃。事。と。そ。ん。と。す。歌。一。首。ゆ。く。入。と。和。せ。例。き。さ。く。あ
ら。と。天。下。代。か。と。き。大。改。よ。も。と。て。だ。ね。乃。數。よ。と。あ。す。只
み。風。世。よ。う。す。は。民。事。あ。く。い。く。な。え。部。く。き。ま。の。也
と。ゆ。く。

○初。學。云。天。曾。れ。湯。敷。く。と。と。と。と。と。と。
芳。よ。な。う。た。か。と。て。ほ。か。る。そ。と。甚。ひ。の。き。ま。と。ま。れ。ま
よ。の。り。ハ。古。ま。ま。と。と。は。非。セ。わ。う。葉。つ。む。お。が。ま。ア
キ。需。た。宿。ア。と。あ。を。過。去。レ。と。と。と。と。あ。う。ん。や。つ。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。

中納言弘平

立つれ事あらむふ生るねとさうにしきの事
古今集繪の歌へりとされりともとておもひ
まは其共やうて陽をさんとぞ別きゆゑひとと今ゆ
くしたのゆゑよけ者ふ生りとひそとぞのゆ
とせうなど南世のすれども此御因幡ちよしゆ
と文治實源寺ちよスをうち此時すれどもそれうべ
福地と和氣秋丁因幡國波美郡福地とある所の山宗
と今も村の三事甚下ゆく宿毛と福地門とよやそ此
山ほいそのみ内國之府すあまたかくすり都ふをゆえられ

たるがんや其守となりて猶人をすく奪へり。かく
よりやうり延其郷とは今も國府村とどうり改義云殿
後は總因寺枕子と因幡をよりとす。と美濃を
あらわすとあるが、能美郷は美濃の所せよとされ。約半
歳がほれ事國史よりとて上の條と分明となき。因幡
とすとすは後をすゝとすり重複従つて上層の時より
とせばとれず。批縁云因幡をよけく却んとする時
今名稱す。さけふ萬別せし所也故に古今難別篇首
出せり。その初學とを古今別ま共部に入ることから
え形にて今兩事とんとよろへおまくせく京と日向と

○初夢を経てさうきは今づくほどを珍く立つてきて
相忍みをとなくもてよろよとあつたしゆくほむれ
くと解る相のうめうつては極く何んに詫みちん
すんなまはやうて歸りんとあひとゆのうひそり
ゆくうふあくてゆきゆいゆもあるすりへせうてう
んとうりれ意をまこと同書は周帳乃ゆうへ夢葉
小説與乃小西郷より金を出でと陰與山よ重ねまく
とくとく度くびりしうよられ和名抄は此書のは
美那よ梅根のあとに其の力とつとめたせくて古

人乃まよ相すとぞまを非也行そらふのにあへま
らんみほ奥山と今とを同一事よりなむはまづ
因幡又柏原郷うくいもあらわせや國府まであるがゆ
後後持遺事は新内田令へ下さけ不中賜まくる藤原
相如女郎風よりとてお一因幡より柏原はかと病れ男
なまくいふ前ひだり前ひとまひとろい因幡のまうる
柏原の國府とさしたと

在承業平胡居

かす鶴神坐とさしにまのとらうこれなるまゐくあと
古今集秋下二條の左代東宮の湯泉所とやくと附山麻屋

またすかおりをち席まするかととかうけりと歌まとす
かとありならま水すとかくゆすと澤より川すばま
音此まの三わくとまの神坐とまほくとまのゆす
とはのうてと舞へる也とひくはあまと龍田ハ年ねの風
多在と神さむるやうるとハ神坐と引よあくとまむ
まく神坐とひくとまのゆすとま湯素瀧川丸川奈とまん
かひくと次毛と説西川ととぬまにとまゆすとまくと
初音云ある家乃ちと後よゆくとま泳よわくと綾也とあ
たよまくと毛領領と全式をとまをとまて絹と志ととまく
とまて紅葉絹布とま湯りと今云あぢり海と同一古今

六帖乃霜の部は本代事歟。うるおとばよて霜乃
やあきがれまゐるれとすら筋段也。其原友子其時而
かばくと川をまわひたるかくはまえ栗のれは毫も上
まほゆうりとあらまき、うる深よそりなせうみ走られ
はゆるれ事有して仍すんとすり出古後だ是也神
世をきくにい神也あくまくは連今もとぞれは文富たゞ
ぬくらすとと古ハ生を聞かしむる例年
○改新云韓^{カハ}なども事も人内せれ是て神功皇后三
神を祀る事は後すくふ渡を慕きハ神世をきくにと之
多紀本朝本朝事乃まうへ渡かや経うるのあくと
りく思ふ神事あこぎるととれ京とおもてへますこれ

立ちと轉して坐りへて此の様な事なるかと云ふ神
をよりこそ是方々く善神とすをの冠稱とゆく
事に來ゆども此也故する事紀より古事記より
ちやうは先神よりされ、後より人とも守護とせ
ばけるにこそ悉く專ら神のみ祠とする事と云ひ
く諸の意はよしとあてがふ事よりちやうは
墨達の神よりて邪神凶賊よりて冠せり其主と號て
乃ちソテ善神との二祠とすと號へ玉妻氏越と色小
薦と色小瓶ともつけらるゝをと云ふれりとぞと通
せば小薦代りヨハ國のさうあくらひ不當す

ソヒナミタマホ

○初學より經よりて之處を以て白波といひ立
更に波とえりんとおれゆゑて見えりとては非也
すとく扇風の画なしは其立けるまをわざうまひよき
ゆてなくく良景うちれとてうらぎを身古く人代あん
なりすめ此風乃きまとくよし色青くから源とん
氣れよひたきやれりもとれあをそじねがむらう
わくとあてがふ事ひてなべて古代の風代をま思
ひやうて其一葉をゆきよめうて不所くもとて
もう歎のうよしのうとさうひひく今を見るこも

すれ更よ白波の三毛^{ミモ}添^{タマ}よすす同^{ドウ}萬葉風の画
と素性法師よりち華代流くさむる邊^{ハシ}は紅葉^{ヒバキ}波
やうさんとよりゆる紅葉の庭たまうみゆくみだれ波
波のさわづきなまく半^ハはうて其波をさうせん
よれなうゆどする意^{イニ}のふを今アラ画此サリては
波^ハきと知^シ一樂天^{タツノ}の歌^カよひく黄^{クモ}纏^{マタタキ}纏^{マタタキ}
有^リ葉碧^{シロ}海^{シマ}水^{ミズ}津^ツ無^リ風^{フウ}と^シひなと仰^{ハシ}りと^シと^シこ
ハ寒林^{シラカシ}乃^ハ大^カすむし^シ波^ハきと^シまうみ又今^ハ大^カて^シ門
人^{ヒト}營^{ハシ}名^{ナシ}節^{ハシ}談^{ハシ}ゆ^{ハシ}を^シお^シい^シ絃^{ハシ}纏^{マタタキ}連^{ハシ}ひ^シと^シま
よかくすれたち今^ハお^シり波^ハそ^シ一湯^{ヨウ}椎^シ子^コ拭^{ハシ}

なごみ蝶の巣をうだりたんやう小藍をうりてありりど
そは大きより蝶毛丸をかへるもれきやうめぐる新葉の
波ふきよそく入ゆんとつそくらま波と見えなまく人
きそはうつて因縁の廣子深なまくはちひく似く
ひとがくおれ因縁と細織とさくかくくま物とへ相手

慈原敏行輯注

往々あれ事あづり波よもんや善代よひちんうらうらん
古今集高ニ寔年乃湯時きのむの多代吉合乃くまくま
大さくまきくさうほくわゆとおづよ善路よもんれ乃

人をとよきはかりなんと多くれをお放せたるをうけ
ふたんうのひやうて差しもへりとゆふさんやれまへよか
の善き通説まことにすと謂はばよてあつてくこゆりた
うのすと宣は書てひづめは堅す理よと聞かたよ
がの通説まぢかうてひづめはすく男女共ひよ通せ
おまやく本業まじめん本業まじと宣のとすく
よゆまくともとがくらみてとへきとわざあくまく
初二句のむとすんなる故の三の波とたわまとほりえだ
ねのあつまふう波のうきあく所とてお歌いとひ
なきとえきとすとくわとそりゆる

○初夢云益圓の人物と帰るの三日すよれ其善徳を
へらすまゝかりありてはれりそれゑふ人々とまゝまゝと往
くまゝともい非也かてはれは夢にまゝ人びるゝ事
などは其者既ふんうきまゝなゝんとゆうにまゝえ
て幸運を夢むるをねるにまゝてはれまゝされ等と
えくきが夢むる人ひともく何事そやと使ひられ
まくしてそまうてはれ參りまくしたばすあれをき
たる人ひとあらうみやとれたりまくはれす同集落
三段すばらしあそわらゑひそへんとゆうとスラリと
トモとくふ同一意地まゝて脅迫するゝとゆる内ニ

おひきのゆきをもとめに書院よつけを

伊勢

雄波も垣通行の都代ありて此をとてすよ
新古今集第一引す雄波はよ生るきこと其子つ
きまたまほりそひよひもくらのせとすうそよ
とあやめとほくくがけふかくくはればとね
いたるに歸此せどもをきの縁と考文云二三れるを
内垣まうといんと讀はばうて不と考せば前より
けるもと垣と蘆とどよなわくとて不と考せば
あくわわの延長よりのなまく太くふげとく

つるを地同集難下小津園へりて行ひ童と見ゆる
若山彦清すは玉乃きひのうをあくのれ様を草内
世よこれかわすれども本と差せキテ御世よの意令と向
一又葉十九長砂よ齋邊藤乃益間毛櫂命乎とある
よりて此玉原乃手れまひとさき命とさけらまて
意色潤色更よならずさきよまと今乃敷のよわゆ
○初學云姪よ幸比うの間内とさき青木さくら乃意
本されまはおせどひとすた多うすとぞとぞ心
やわんともすへ非とほうとも思ひけうる勢とつて
あるもむく過すとぞは仰りとまうむと

はよくつづまゆくはれくゆゆと無むけ、心石よみのん
やわんをもうひをうて、うすきのうすにねす其處勢と
スくあつて又言はせども、すくやよへる事、事とおくる
事と黄葉の過去、往水の過ゆるを、の今の詞とも身
まうらたゞと色あふなとすうされ、生せと死とは命乃
終るまことうけくろとうまを非せたりとほせども、す、
命の終るまことそんかくより終りともせず、ひち終る
きと今うちがこそうたあひもつて、すあひこと
も過つゆくよせれりか、旅するの意をなさざむ
うみみそせりじまれる所、謂葉華と黄葉の過ゆ

はめのるゆうなどわは彼世へまはとるむむり一事と
此世と絆ゆくことうそとある意つてたゞ

元良親王

徳ゆまは今つて用、難波うるみとほくと色きんとそぞ
後撰集、ゑふ本ゆうそのじよ京極の傳、身筋とけりけ
やくあり後撰集と引くすと、あひゆうかあひくと
思ひゆえそほのミシマ代のまた、事うてねらひのうす
きふお前が用つてとなくんたまひ身と様くまふ
きんとくひまゆうとつるやもの意代くわとこ事ハ次
るがのものもと命はの統代所よりてるれ難波うるみ

コヒシナムフレモオナシワニセシヒトノヒトコトコナタミワカニ
卷之三死乞其色同着左何當二人因他言辭痛者將
有とあるをもとよりするものとおも用ひるをゆうひる御
乃今どうしてとゆうてやまよつてはああと向を
うゆう色がれうぬは其も御う語なれど是すとば
源氏相手と今はこのせ中ともせりすとるをうよ成
ゆくらむ若葉と今はこゑをあつてろんきやうとなり
きの敷あらへてとくにそれともうち死後の語聯うされ
なればあもられとわきあらのうちよき勢いあとおけば
へり又若葉中ればぬほひさまからひら波ひくじ

○改觀は傳説はといひかづかく傳墨あまく
とこと解きやうて御事は本めきともあるときて之
をた非也さむもの要點を於傳説も言ふては彼も
此色誰をももした同じと云ふとさればすらうりて其
すらうるふ本をもて今けの同じとのえまつれり
實は同一本ともに同じとづらんやこだ真役はも
ひよりぬまじく解きそぞうてせゆうなりり
○初學は歌まてすうせんまくすよねうひよ傳する時
思ふよとまは非也傳する時思ふよとまは意をもん
ハ思ふよとまはう論すくまとたまひぬまじとひく

言ふよとまんや又同書は既より本引て、事則ふ
とを今界て前するをきくもとては今さうあくぬ
かわ假りともせ人されたりぬまじとまは終を
と云ふよ解きそぞくはうきなはとまを立あまは終を
思ふを得がなりとくわせをまつるからてれ意ト高
てあよかどくともとまのやう切まるとくううう不
成くせらむ事をもどりるがゆうて後もに今さう
なううなどれもくと宣へてまふあす數々の傳ゆき
ウをきくと思ひ終く今ひと傳をうどよ二うれとはほ
用ひをみえまくと稱へてまひをうくアレモう乃

事もあくまでもうやうやしく更にうりれよ
とつまでもううすれ堪えきりゆくせむはくと
はれきあてほまて身とぞうさんとまてものなまゆ
ずやんと告やうまよ是又御書の事もまこと辞く
すく事とおぞれぬふ極くぬすよそりともひを
服毛筆毛筆事あり事せり事にあらでなくあまの
せくつは皆画本のじくよきとつる所、高祥の
みとよきのとまに今く用く事を以くわまもなく
平うれら常れのよき方と増よ以てつるのをま
こすまほきとまれきりとたゞ數のをめう

之ふうまほく今とぼと退済すアハヌミテ
セウハズシキマテシラムとまもとくおは済ゆとま
ラ物なき、水豚津糞ミツツクのとなりへとまも非也、ハ河海
の水豚と考へてあるとこまを細波江引作細にと
船乃か入する形よわうと深きよほうと細々やくまし
櫻枝道と鶴ト芭葉卷十五長波ヨ之保麻ホリマ和豆ハナダ莫半始
伎中兼寫ミツシスル芭葉サヨ保里ホリは欲里莫半始伎之都モハシ
和名抄毛ハナタカシ水豚取ミツヅクの称あり草竟ハラタケちまこいと一榜
合ハマ本より一戸すと刻ミテ毛減モハシとげるばがのすと
まほく水豚と立つてあるわく

素性法師

今えどりむちうにまほれの月とまちあはく節
古今集多部へんとやうてもえどりすとよまふあい
乃一言ひをうかく西之月月がきの月乃はせらすと
更しきるどきをんせうとゆうとゆうとゆうとゆうと
うりやうとあうとだまと初二とふくまうんと
なれりやうとまはあうと同集と今えんとびとお
より清掃ととんととけと命とをわうとひと
改めくみ別まく事めくやうとううとゆうとゆう
○初學の今えまふえんとんはれくうのこなうとゆう

ハ非走りてたゞまうやくとく内ニシテ度へらぬ
モトとくの走ニ度へまは前ニ云我三日不休のゆきと
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
して詫うりとくとくとくとくとくとくとくとくと
事とまうとくとく

文庫魔秀

妙くと妙のとまはれとくとくとくとくとくとくと
古今集祐ト是良のとく家の歌合代をとあり紀氏背
革也とて古帝は故く魔とあるとくとくとくとくと
改朝は秀くとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ウナフクニアキノキノキノキノキノキノキノキノキノ

意指禮者林立山風緒言之云瀧とあり是そ西へうき
落ちが乃古奉りばわくすさんとあり此新撰之意之云

瀧乃字もあうよじて又ゆべ北は二をまく事事と
き古今序の後は便瀧乃事本をうちて是後又ノアヘ

ミヒト人ゆまた即と画す迄もんぢかゆされはまき
サキシテおうふなぐまみ代おそればうへ風を
ひらくすすんともさうとてそほとき風乃あくまき
えちす秋の意はあくまきのあくふかを草木れな
ひよきれ、之は殊出風とあくとすうるもくき
ふあくとて風の名と用語へる也云はむ所は今、

わくと宋そと行きなとたやうふつまはうりて次郎石
首にまくとせんと頬のばくねばくねあれもくうれり
核の核戸やをとあう嵐のまくのとて壁をたらんと
ま進うハ滑方戸をあうとあうとまうけふと古今修
あうよくは意とくのミ其方とくの敷ひせまれ、もとより
テヘトソスミ事論を一書紀神武紀よ諾と牢無那利と
済一美糸中を三船あたり於此とろまくとうとうひくん當
時力うよむへとひくい袖をせめく年々より此般
たと色うよびとてはさるやうなす間ちう一かの新撰又
部子とあるとくとぞよむなうき和名抄疏類のゆよ部

子乃假字年周とあらずて今をあつゝむ(トモ)。
ト移御十か乃く之れと改る者とてハ牢閑と云すんと承
順の時やうく牢閑とぞひなうす所もち深に輔仁乃
本草和名より都挾とぞて牢信とぞり牢と牢とい今古
たるる乃こそ多よやそ馬とて後抄より無萬と號り既
よ延長の時より乃名稱を起たんじて大方へ轟き
に之して和名抄乃様とぞてなまく於當時の称乃ま
おもまれてとがりひそて後世よどりて室家ア佛字
アのト名抄ノ一修撰の書生ア古書乃場りハセキ方
アの引出ア古傳字號とぞてと詔帝一より嘉慶ハむ

しなり多きみ多き代事取れ此をばく見えんじてあらこ
ハモニ美葉乃致モテ妻ニニのらう一也きりなうとうと
ヨミやまうて彼久ハ皆むよをやす事とぞりトウ致乃
意をあらうとひじ一也きりと書へてうそのとふくふす
てと漢人乃か一也とぞう事とぞあふ
○改親本草本れをとくとは本草もあぢう本草ハ色ち
りうとまこととまこととまこととまこととまことと
被重をとれをとれをとれをとれをとれをとれをと
きいがの本とくともとくられわくとハ多ふもいもふも
まこととまこととまこととまこととまこととまことと

又くりきもと嘗て未だあらずと候あらず
きとそぞり一首のみちのゆきうち酒(なんやまき)此
あらんたゞも海岸と呼ぶく酒ありとす
あらば諸國には嘗てアリす國も要害する者と那
うとソアリゼトク冷す

○初學云新撰美葉^{ミタマ}之折よかく葉葉^{ミタマ}梅花雪余之
半札^{ハーフレタ}古事記曰牟紀^{マツノシ}云ハ之半利乃酒とあるは數
回綾^{アラシ}ある酒の事と云ふは非也まつ志^シとあらうとは
言乃と黒也あらうは志^シと云ふをたまひ綾^{アラシ}と解す
へきふあらず按^ス古事記云ハ鹽折之酒とか義く

やしはを豆乃酒也日本紀云ハ醸酒と書ア是モ古事
記よりてやしはを豆^{シシ}と云ひ下の文まれ^シ古事記曰本
紀云ハ之半利乃酒と書一^{シテ}御^{ミテ}アリヨリテ
タリ^{シテ}すれど其名義ハ私記云或況一度醸熟綾取其
汁^シ并^{シテ}其糟更用其酒落^シ汁^シ而更醸^シ之如此八度是為純
醸之酒也謂之鹽者以其汁八度綾返故也今世尤謂一
度便^シ第一鹽也謂之折者以其八度折返故也是古老
之族也^{シテ}此後更^シ之則所候^シとハ醸酒と云ふ
やしはを豆の字^{シシ}と云^シ證とするはまろゆの也

月々またちかねらうせりれりとおひとうねうへあくひと
古今集秋上是貞乃子の家の、古今集歌とあり初學云秋
てふみのむせ下の林などとほむむてはるが一川よ船
とわ川たまらまちを發すまで改新する里を傳承して
文集中乃秀句と號してよまれる秋年あれを此す
と萬字橋中霜月夜秋意呂翁一人長よと翻案によ
まれてあやとす

○初學云皇朝乃教文本と小唐代古本と前編にはま
一きほの人がすくゆ也皇朝よりもりきく古事記
めぐおとあくね故きくらば難也大よき歌は古事記と

引き下るの思ひにだらひとまみて只其歳とたすらんと
すのまされい度にまれたわふまれせよひなひ聞るふ
とく事とくれどもうちふまうせてねきるの自鶴のよと
更よ病なきる也何そ和漢と并すれひまあんくせ
人乃やちくぬ宿もい古事記とを裏まふ國へくさよあ
すめや皇朝の古事記んじた人をみくと到り
えんや此等の古事記とぞくの事へ過ぐりともぞと
皆其世人以ふ能多せり白氏の文集歌を詩経の類也
まこと其題を設てよまんはは病のうすうにあひひかどり
そじてくせよくぬ故事とくわく人乃耳目

をあらわすやうな事であります。人代するやうなれ

菅家

此のいをゆきと取られよ向ふもそち此身き神乃まく
古今集釋の旅朱雀院をてせうすうげり因るよとよ
み後多きとまつてわまと此のい數きぬ我ぬきなどへ
えくじくもあす折多くひが衆乃御のまもむし歎け
て神乃湯はれまなまほとせきは湯心もあきたう路
てまきと同時より御法師もあつたまの神也さくくま
えひ葉よりく神やくさんとあるもとひくじくらむと
也此のいとだ是もとまくと旅多くひきりて宣へ

至高市郎よ山森せりまや一草諸花よとくらうくま
ほまうたひとそきのうのさんすれんじら虎をせひ破山裏
みた手うせきを勢うひと又またまの御がおと中暗してま
とめこゑつて今ノ算もとまくとまくとおよぶとそ
アキアシトコナハ自然の修教うてついをくじくに
見られ候あまくかどくお文字と之間のすばる候乃と甚
くはやうなう心とあきくはまひますだるふかさ
ねる又自強せ古びとよててはとほとひくとそ
くとくとくとくとくとくひなううと諸候まくと
まにあらうとのあます意をよみゆきうべたう古今

又別として、うの様ふままでんざんとすりて、おのまかく、落
と頭捕綱を掣つて、金とくのみがされば、けをもろとて、萬
うまゆく、よもぐる葉巻四よ春風之聲、尔空也。名者有去
テイヘナラストセキミカーニ
而不有今友君之隨意圓巻十よ靈子春音、トシテ、立
カヌミタチトセガトモキミカニ
露羅立羅、龍君之隨意圓巻十一よ吉身一者君之隨意圓巻廿
ニ辛之伎女、我未波伎美我未仁麻尔をも、もとだらば、
れまふまよけり、ひすつと同意して、多とて、残す
あらず、嘸あそそまことなく、ほのゆるしく其事わくへ
げどまうかみ其はれども、ちたまく、うす意よ聞ゆるあ
アリナユミヒカ
まきはうて、さくとせのつと、傍年す、又様う引者隨

意依日友、と雪代まく、歌へ、歌ひなんむかく、中間すあふ
もどり、落すまくして、ゆゆる本編、古今材多、落す
さひのまく、ひととんとくと、歌照の本、ひだそひれまくま
す、あとしもととて、ホリ、なれど、歌く歌きて、とやまねば、
彼乃自然なり、とひを大や、尔空まく、物ひくさうとあらり、
○改親云都と山、附帶、とぞうほひすて、それ、鳥の清
音と、詠と、そぞく私め放りよ、ひをうり、放せあうと、もと、
山すれわに、幸ひすて、山乃放棄國す、なまは、是と、聲
とす、一山は、とぞく、放なれ、神の里、一まんす、まんす
うけすと、とより、知事も、此もの、境乃済はるまは、私

の幣へ得らるべとす此山乃紅葉の跡なりとおもひておもひて
はあれども神のまことにあまゆうすきと云ふて、されば
書よなづこむすむおおみの邊さうけうりをのぞめやきひ
る也。御書よ朱葉院とくわふい圓集館よも朱葉院乃
そと布引乃院あらんせんとく又は尾西川ふおもーま
しの日などある數のうそその日く所と養ふる乃
致乃よにきるおはまほへまほきる意あふけく歴さ
くおれあをとす陰と申すひく私乃施りよひく又
私乃幣へさへとすとなくたがひのあはくとあく
ともくさまよおませくせきひとすとくえさんや

てはとちりれ御事の中よおぬとはうひの施とくう
おぬまわせんとおれゆうとおとおみゆきおはくと
ほきまくとくねやけ私乃幣へさへとく取まくの施
ひまんや致乃ゆすとよほとておまひのそやく施うと
おまくはりまくぬとお迎く壁とそく人れ處はと
ふ行まれね一門とて御さんよおおとく其れのすく
きとくん、けまふわまくびんはくとくらひと
かくよくだくよーせすれむのまくおまきの意
つと里ひく幣をとまじくすくは後勢とくは得と
諸抄乃ととひを解ふ其他にまことあんたまで我友

侍の代までまことに御心をすくめに思ひてお送
りあつやあん事ふ矣すと云ひて平賀四郎と見え
るまことに又改へと云ひ神乃まに多聞するなどと
いふまことにありますといをほことさうむちせ謹之又都と
いふ御心を取れどと云ひてきりあらそひてはま
ふ見ゆるもとと御心改流微行と好きをすと云ひて大和
橋洋河内に遠ふよきひと巡幸へとすんばらひふ
ゆすりくろ湯ちひきよ御ん波や右太衛門もうりかどの
太師伴まつべと御正経をなすやまとを真人の奴僕石
清源さんすもの跡をふひく私心をあらぬとすまふ思

のまねがさうあつとつ宿と志遠倉卒せすにあひ
近づくよれひの本なる下帯とぞりひとすくねどうけく
あらうたひとすくねあつとすくねとばやうて意
を讀むたゞてすと聞かくとれ得也まことはとくは
大やうもとまちな事ふひのろくかまう詔とてだんく
ハ革とどもとんハサウトナリ枕とまことはゆく事と
なあうもと基外毛革とどう革とさうなと極めて
のびくゆく等前とまことゆき拂く極くから
取あげくが向くえりをとてはうとまことのひくわ
まきくゆくさうかまうきのとされい帶とて

よしとすむゆきゆくゆきりあらずもぬわす捧けわ
すとすまひとくきとま中にまのすりとみせゆと意
得さんいがくとめよれもとくとてに抱極すふはくろ
もじゆうまなまの今は坐つてうらむ方よのうひ
なまくらきれど幸みを湯とさう麻とさう脉とさう角力
とさうなまくとて其活用を知へき也

三條右大臣

名の如き、豈能免るべし。余一朝も一色也。
後學集を三冊乃至六冊づけむ。其の書中之處
亦我意の如き開き切て傳り初め小名所始りと爲

すまふをもせんそくをせまくやすのなま
うらわすわあ事准をもてくを第一今里主意
で品くもほり、萬の縁なしとて今を内に
うりじくい事、梅菊にものせゆあそむめよ
ふだむりわまきひ病う事にとの敷居とくつゝ常
ありはるの相うち重くさねんすいあらあらそれ事
たまはるのふせよとくはまよりあらはさまの
せつそあさんそくうされといふ意もと又換する
名前おはとくは、モーナの名と云ふと云ふ
やあんまきくきを坂とよと云ふと云坂と云ふ

はく本稿をさうへやすくはり難い。同集の神と云ふ
はく本稿をさうへやす所のゆゑにあらじとすくは文稿うす
牆のうやす所のゆゑにあらじとすくは文稿うす
とすくは文稿うすのうちほりて須磨れ御人をもぐとれ
きくわらみれむきくは類のもの萬補集とせん乃の名
のちむすびとよこのく人見うなはつまくうり元補集
よせみたことくせれぬとく篇をうてん命なくしてなと
當時きるがふく代名とよみ事もあり一也後拾きよる
道雅三位のものとてねあとぞりとねは本もくなりふ
きくがなとすれ長稿集はやうて其能とすくがうして

二所までよろしく此外とぞまふて此方とぞ斬ひるやう
き今力は事件まほくに通じぬ物なまく、或リヤウ物也
は事件幸いも幸い事とぞせらるゝ御へまうめ
○改朝は初の事で名ふす方をてまことれを破ま
るがものうちふすはすにわす都多ましゆく多
一揆はつまよはんとすがたみは圓かすうど
やく一とては非也、まかくとてかくせんとて
まを名ふすりかたすとて、ひまくは隠れ、と
うはさん又またまの萬れどすはわすと
（あ）放くまうる所歟を我格はえどもやあすら

金板とぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞ
きつとぞれすゆく名ふりやうとぞんかうりは夷と其
拘なくてはうれとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞ
すうんとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞ
○和洋とぞれすふれくお病えあつこへあつれす

ま歸りうんさりやうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞ
佐詔萬代とぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞ
と其事とぞくわはとぞうとぞうとぞうとぞうとぞ
其ハ何とぞうだよや其死方とぞうとぞうとぞ
ふと思ひうて金板とぞ萬大とぞせんじう酒よ酒

と其處にて廻らざる所と云ふ事あるんや又さうすも
ひれよあと歸るゝと云ふ事あるんやおまかせすと云
男のうへ通ひあれば多きものなしと思つたる乃
修を以て

貞信公

とくに其代りを棄てらるゝ今すみへゆきがましに
捨遺集輕松亭る院大井川は清すありて御食をもぬへ
き所也とおほせりて本乃り奏さんとてとあり改観
又大井川の御勢勢をうるまゆり取ひ手小食の紅
葉あらそのこまかに其心よみそよみき是是今乃仰そ

うけ移すてまかひを晦くに其ノリ主上に奏聞すとさも
ハ乞ひく御幸あと一其持まし生れ御食をとてとく
給まれとて心とてとてとてとてとてとてとてとてとてと
核井田忠友う若きち名漢勝歎えとくとく年一たまはと
いとく

○初夢よ大井川御幸彦まは考とて別よかう其文
若々れいとふ殊す其大じいは此小糸山の秋の清き代渡
とは处事せよれのまへ一二日代候よ遊の所遊
そと此所を清涼とす仰ふとまくとてとてとてとてと
えて後身を御書すると後記とあそを漏せり御書は處

書立是九月十日御くお首の御手稿よりて貫之等承
まわる事をふす今集は御手の端御書立西院より
ぞうきたる日と一所まで巻かずと不寄して諸
書より影徳よりハ行章此度とぞにひとり古今
の御室をと書きへ給なるとす今と書
天皇と御室と例の後人三得の御室と書
之をもなまくとまう奉りくは奉書はげまつて之
一景樹接するふみ亭玉院大井河清をとあらハ日本
紀略より長安年十月十日清室章、大井河有、旅次
とあり此時なまく杉をゆ同月十九日天皇章、大井河

清室章とあはせやと自信公事より奉りやまと
たまゆりやうて相模ふ事のハ院御史とゆけるなん
御室をたまうそとまうなりとぞとて御室とある
さんとまつめりもとくからくとくはまく甚清う
こせようちあともとまんき御次事とまくとくはめくら
らまくとまくなりとくはとくとくの御室とある
左大臣小姓すまほ事とくとくとくとくとくとくと
れいのため井の院御室とゆける年八行章よりせうとせ
ま乃後たゞ一太和物度とせすとまくとて奉ざれりと
や興ある事なりとて太井河乃行章とあ事とぞ

絵のうちとあるを此清す代せよとの事一言あつて
うちそれと約まとうづれば、かゝりとかけらを教
延喜セ主めふみどりのあやまつらの也。古の古年の
行幸ハ九月十日、御幸ハ九月十日、前すんのがよ
そ九月十日、御幸ハ九月十日、後すんのがよ
はじめすよわく、一度内三のさゆえ
と宮ひく今と色れどりなり事、あらねいこく
がうべく、よしよしよよ、官家乃御事代給とよみあひも
十月代まよ源氏よ朱葉院の御事内侍實。十日十日
候りとぞもたやう御心際よりくらうとぞうりてから

接すちふは持き集の撰者を知らず、於と書をばれどか
やらのそりのそん等書の語勢あらきとゆるからに又
みち主代約まと古今集の御事とては曾西のり
きと書れど、産經のとく此約幸のゆきりく法
曾西のりゆきりく法、あらきほりびたみあらひみく
主代約幸をもしく附幸あり、力二うん改よぶ後
乃延長守延代約幸をもりとす、院の御事代清すれ
ひきよ峰、とくあらきとす、其のひ詩致乃さう形く舞
樂をとあり、事西を記等に及ぶをもだは此延喜セ主代
之ひよ貫之躬恆おれ數人よもよもく形よこすをも

毛法皇は大ニ御用御事多きをあらざれ考へ次ヨリ
テテ志を滿あむ一方妙くんは其歌の詞書よ法皇西の
ふせりまくらと書んる海うみ手滿卷のゆゆ中す
をさざわれる毛法紀ハ海よ志をもとの古今いぬ附乃
勅撰な毛子そぞに古今と傳へて諸紀のミタニヒ
キルあるす又古今か天皇はあんと書くと書うてよい
それ毛子もうち此處の滿卷ハ昌泰二年より清彦師あ
リ後毛子生毛法皇とかまく也同集はあひよお門より
ちとあるハ昌泰元年代に至るて清彦師の毛清彦位
の後なれば朱雀院とあきそまくをそぞ以ひどる

セアリ行をなんと天皇主となくす歩く書(ま
にあす與西のたみゆきおもておもてがとそもくよまと
太よそ記源と云ひの前後れよわまとそものけりそんと
てゆくとまくと毛法紀と清彦セアリ事とがれり
ねひじくとす候(ま)くすりすれり彼古今參進を
延喜六まなりの彼序よりすれり彼古今參進を五年と諱是
此太井行幸毛貴之の序よりそれ以前乃清代毛の
九日とさけよつてくらとひ櫻基乃歌もみゆゑと
ひくすやうのく葉北花毛みゆゑ色はあきてあまると
きて十日なる事滿年をと一月と終まりあるにせ

乃歛者もの序文を於十一日にわりて再^トの九日とひま
也とて史批わやまりと抜けをなすはつゞき事也歎も
奉^ト也とぞ大やきおよとつて序文ハあくこち自乃
九日とまよひくよあるをハ九日也ともみゆづりと
云事のそれもや紀碑より喜^トす九月十日法皇石
文人賦眺望九歳之詩とあるこれひちた井河法皇當
り也とて是眺望乃能^トきふあくすの御幸乃歎
乞其數九首なりふく同日同類なりすづらもす一聖
十日乃除^ト伊勢奉幣天皇御八首依^テ先納言參議
者實給宣命其日天皇幸^ス大堰河^トありは天皇幸大

堰河の一句舊記乃本文より前日十日既法皇后文人云
乃よたまさんと紀碑の撰者かや前史の深^ト院ひく天
皇云^ト此句と摘要く次内十一の條下に属せんなどん志
う色十日は八首後^ト出御ありて伊勢奉幣北宣命^トた
まよがひよ大井河^ト遊幸あくべきも本快^トれぬ
あらひとて舊記^ト御幸比^トすをまさんとあらひと
思ひくはきだすや奉^ト御^トも今知^トす九月
十日天皇幸^ス大堰河^ト法皇后文人賦眺望九歳之
詩^ト本とて奉文^トはきだすん十日ハゆくより重陽の後
宴^トすは其數九首乃歎^トもそれ文人大井眺望乃

物と接し其の影をありて歎人乃諦と云ひ也され
そもそも致ひ題のさまにあらず中止を繕ひよたり
とある。としまして霜鶴立湖とありしん其ゆゑ彼
序の題の報門つよからてされどもさうされど書
れりともとはあらざきものかすまはせぬに記す
とみ取白鶴とよまれるふと霜鶴なりすまちくとせ
又支本集は延喜七年卒る後のは門の古樹西河約幸
さと勢もひきふ忠岑新和歌序ふとて其文と引
あらうと見え候と貫之のみあらずとて
實はめくま加へてとすまくまくまくまくまくまくまく

みくわくとくられは此ゆれをすりてせうだりてもあら
らんととた後すとふ其の序歌の貫之の如くけく
あらうとせうにけくへ推めてせ極すふとよと例案
九月廿日ハ南殿まで重陽の宴と賜下所食わう十日の
後宴すには宣朱葉危るそ同く重陽の歌とあり
文人詩と賦してある事なると今年こその三月と大
井とて勢をもとされはくすれ十日の所食はは宣乃
太もあらずなりとあらきとやまと以小翁山の由歌是
みすりて約章をありうとはうりせよ取とゆくさんよ
記略したく有詠歌本とのいわばあらずたうねと

ちればゆきうち輕くは此湯歌のうみはあへりと輕ふ
人あらず然らずすあり其本せずあくさきのあは是も
是を記せらる也をもく此時その下よたるのとありと
尚もそ詔よびとほはうちの歌をもとて公をまふ
はをまかね習俗なりよりすと歌の事といひやう弃て
されすとまほがむり乃勝事と云ひ燈忽丁書れ
たり同紀延喜五年九月十日乃條よ左大臣於東宮直
盧賊籍邊有殘花之詩^上とあるなど乃歎すより其詩を
あくまじ仰むりなまゆく詩とくふのを前毛期とく
う書ゆわく歌とくはまくとまゐる御世との歌合と

とふ二段とあるまねす古今乃序ふくみ若解と歌く乞
好みの歌よ埋本代人とをぬ事となりてあられ前毛
若すきかにゆすとすのをあくす家やうり其始を
思へかくとくせんわくぬうとそれ移す乃情を考え
すと中か自然よ唐物めくふ跡くて其處をうかが
及空る事とあらときたりすれをもつて乃大井眺望
の歌を詩人乃派となりとぞとそそそ歌ひきりと
えんよ情意れめの歌すや其音のうみは詠きくき
えとゆく諸史よ傳する歌のうみは残まなくらう
ねく只歌のみ焉なら行幸せとくと歲乃今不

あやすめにかどくは貴之ゆれ名譽みてう門改道と
つけられしるをぞき

中納言兼輔

みづの原りまそ流も山川もあらそとこうりそん
新古今集五一部とす初夢みつて事とれおんとく
くふはなをかくまと多くよつてひじみつて聲
なづえひやまれぬむちに難原ハ山邊の國相樂郡と
聖武天皇奈良よりあづく都とすまねく久余乃都と
ひきうちも也泉川を因所よきわらてたゞこハ岩渕よ
里浦也ゆゑよ泉川とすもんとすの且其泉川を

川とさくがまひとせん料りこみくよて序とようや改
鏡云歌集とはすとら詔書三川題すと兼輔とてすとふ
乃ミ少すとくのと泉川とよて解ふとされ初見と
すと古今集五部とすと其勢すりま九首にあうて
此二つおり甚間はある七首これよと人不知是也第一と
大和すりみまき川とよてすとされと新勅撰雜歌ふよ
ミ人へとととととととととととととととととととととと
ほととととととととととととととととととととととととと
まととととととととととととととととととととととととと
まととととととととととととととととととととととととと
人へとととととととととととととととととととととととと

より集をもじらぬうるまて入るきなむかはまくわる
事多きれい此をよみへしりうりと彩古今集より
やまとて兼補で乃て今と今と今とおふち絃
アモトアリアラシキモ

源家子相臣

山里は多そもひもまほけの山里とももがまゆううと
古今集冬をれすとよみとあり山里の樹もだい行を
われと多そもひもまほけの山里の樹もだい行を
まほけの山里の樹もだい行をれのまほけの山里
ゆとがくとのくわに自結乃工とてをぢすれ多ほけ

よ心外なるひ定作よどまされねあくねハ和うなとふ
ハきどそんとぞとぞれねあくねハ和うとぞうふと
よたうのよ仰う其言そのゆきハ歎また讀くつまつてひ
とぞやなすよ歌ひと其とせ落と而い聞一か尾

○改鏡又草色とぞは必至のこよはかくくへ草木よを
わくくす古今集雜下せ中とぞふらハ多まふとやあれ
うれ喜び多よめんとぞうりいよとひのくつひくうの
もとのみよろになぞくとぞくあつともの初夢よとすて
乃多か色枯ぬとあつとぞうけ非也多ととくとくと
ふむくくとすれらんとよとくとくとくとくとくと

さるなんや又ぢ今ひすばせゆどひのう甚ひ代草本
のうちとやうとくをれきりかむことひ意ちへよ
て更にこれと數すてくはやうてアリシテ即ちなん垣
林見すれ候處うれ枯木す初冬乃とま候ふたりの
いは山家とみづへ深林幽谷れもまとよも事とぞ
滑る落葉れもすらまゝも無すり色樹のうへとつ巻
き本とみづれましゆじ也古人の歌ひえらきのうと
ぬほうそ常の心地外もむひ山里なむとまくい教
迎きあうりとまうり今やすまうり候者とまくい教
ま身みくまゆり

○初夢人日と仕枕夢すノ人をくれる耳と毛さつ
ぬれとひだりてひづく耳とひと今はるうと
そと目とひだりてひ被夢すにゆき立まくとそと人を
もくならき耳とひと寝あうと思ひ一ふきくとわ
此文とそくよろづたうなうてそくいが非也此をひ
はりつねせうまくたまきのと書ほされはあくが歎
き文のゆふ立まくとひとなうに般をやまんせ
力もこなとと聞へよやうとおひすそくにとのれかく
れわめたまくうたうあやとつるなまいた此年とまく
ハ只耳ふきくとくまきのとがまくね事あく葉集卷二

吾聞之耳。尔好仙。卷十。言云者三。三二。四八。取而。なと。

を。か。ア。ち。か。か。す。と。き。く。が。此。事。と。耳。う。く。と。そ。べ。

そ。の。ま。れ。平。信。也。と。の。ま。た。う。じ。に。と。も。と。古。人。の。わ。く。と。作。

ま。か。や。う。は。と。思。い。を。せ。る。よ。り。み。れ。ぎ。と。清。女。乃。華。比。

妙。趣。な。と。上。鷺。詠。ハ。か。ら。う。り。誇。す。た。う。ほ。と。て。人。目。

人。比。ア。る。事。う。と。す。ま。ち。我。因。と。す。は。あ。く。す。耳。と。と。

く。い。影。さ。く。耳。な。ま。た。自。他。乃。た。う。ひ。ゆ。る。と。や。う。ゆ。

す。と。と。れ。能。ま。引。出。と。も。あ。る。邊。也。

凡。阿。肉。躬。恒。

の。あ。て。と。ま。う。や。ま。ん。和。素。れ。め。ま。う。せ。り。し。と。き。く。れ。を。

古今集。秋。下。白。鳥。乃。衣。と。よ。う。と。あ。り。初。霜。の。並。見。て。

か。く。と。ま。う。す。み。の。み。り。を。く。ん。と。な。う。だ。只。サ。は。う。ふ。

や。折。く。ん。も。ん。く。あ。そ。お。と。た。つ。く。と。ま。ふ。あ。く。す。と。

朝。と。深。す。暮。れ。色。と。す。サ。と。う。う。ふ。也。初。二。の。白。ハ。と。く。ん。

あ。て。す。や。と。く。ん。と。つ。く。ま。と。諭。よ。ほ。ま。と。す。く。く。も。也。

○改。觀。よ。と。く。ん。と。と。く。ま。と。諭。よ。ほ。ま。と。す。く。く。も。也。

よ。う。う。と。そ。れ。ハ。影。の。般。う。み。ハ。や。の。字。と。中。よ。あ。く。る。也。

ま。く。白。鳥。よ。素。れ。め。ま。と。人。と。ま。う。い。と。つ。す。ま。あ。く。れ。

草。花。歌。う。ろ。初。歌。も。ま。う。降。く。白。鳥。と。并。用。く。か。あ。い。

て。ま。う。う。と。は。あ。で。ま。う。と。ま。ん。や。ね。う。ま。う。き。

といひ残ちり也是事とおとせふりて與つてより
也とがまくはよんあてよんすなれとねうそに
さすと與すとへとがまやな非也まづよんやもや
文字とせうてとけふんあくによんよんとよ
まどろきのせされときんうの意をわんやとほ
つうじすれ詫なすとよまと半角りとたま詫又
歌りゆきくよまくせりとあくとんとまくすよ
ハ非すとの又熟たびと終る事にせきかなくすと
ソヌキウヘ代をくわくらいくやをくよと
かくまはゆくらゆく設りてゆくよくたゞ

せうだらうてどもんとすこやかくは、きよがくの
あそびをなんとかひかれて、すそをくわぐと、裏地さむ
まつをはようする作意也

かをなじむすく何のうともゆづれすれより
をひやをんじてはまふかきの河内郡ひより
改西ノ所例のとれりのうあいの言なすト又萬
葉の年者也經南トシナムにあまくを歎辞までとく聞えども
奇也年者也將徳榜者無二とをきて年ハツシんやと
ホトトテキムチトアヒソトハ御爾りうて故ニモ
たひ御リテ卷九タク於久礼居カレ而吾波ヤハコ也將急香霞カスミ
多奈姑タナヒタ久山平君タケキミカエ之誠考者也於久礼居カレ而吾者也
將急稻見野ヨヒンイナミ稻芽子スノキハチ見都体イナムコスエ考タマ武子故尔ハタク
ありと同てにをはとてまひきん我ガソリんとすや代

致孝乃そく

壬生忠岑

其の内はまれく又そうわねうり時をうじたるはす
古今集コジシキ三野ミヤ一すきとほきめくつわねうちそく内
のをくふても忌りきのよどりこそ今、うふ曉ばく
うきぬきと在明のいほきれのみ松よおけ是初學云有
照の舟れ英ヒメのまとをや面マツづくそりけうてありもの
なまは人のほきをとどくと御辭ヨウシとぞ小曉コトヒとよ
言と今をうかと活世の行進又改朝カイコはせ方あらひと
ゆく行進ヨウジンをあゆけとまく仰りとおととれとあと

すと云額の所よせりきままた無ひく不意歸宿とる
「と古抄よほそそひうねつ

○初學よせりきく行ふふて細くとばわく
ゆくよあき歸りよむうりやうらのほまれり
一はあらのまく院りよきもの解となりて
とづか非也先ゆすひ意能くれふ似く御のう本末
きり合ひて間ゆめりきとくにけく津祥のじくにあ
事より別まわりとくとくにけく津祥のじくにあ
よ思の兼ゆるなとすをいふ能とくとくにけく津祥のじくにあ
ひすてくもたるんぢすをいたち黒の院ゆう後

ハ何ぢり曉ちうりきみのはなしとらふく黒の院ゆ
うとくの所よせりきまく今、うとく地よ東くるま一む
きぶつひとれちこと黒の院ゆうとくとくの別き
むれりありて別まわり思ひなりて晓ちうりきと内
にえまうりうり也とくとくとくとくとくとくと
とくの東くるまと祥たすくんやうけは語釋をたびひて
わより歌ひとくわくひ歌の奉と祥をうて言ひと
ひとくひひのうだなきだおさへはまことくわくひの其姓
と推定もまたつもたてて本のこまうすとく此言
の書のうのた壁のハ劇場うて者あらまんのせとま

と今の如ふうへ意もんをもつて方にまわひなせ
る。其首ふそけりふまうてありきは面白むすめ。其
實よやれて事いがたうかどく是常れりとぞとれき
てそくれりゆきかづくわやそろひよかて親聴とせ
ろすもの也。統中改す力道よより田代の庸能の福な
とれきとせよ其教わりをえまうて氣よせうろく
あらうにゆきりき。其面見うじて源をこしと
まくとせんはらうだまう事と浮へんや意と固ふ
「又同書よ都例ツラメナキ奈支の例ハ良末の約とく言ひす
ハ頬目無ツラメナキすとあそれも「ます」とうきてと面強

くしてわざとよみ葉とは縁をなくてあるものよひ
て無代ともふつむはうきされと云代ゆばな在代をうと
ひまを非也接ふはまぬきの無傳俗代意もんと
ひまゆる美葉よゆ縁をなまことつむくわれとくさきまふ
方よりうつりて後よりほづくむはまゆくとほまゆると
ひまくわせとせよあまもひまくわせとあままくわ
じくまくわせよあまひんうくなす獨りうちれまく
安まゆは被ふくゆくゆくれき方よなむよみ葉
奉字よ都礼毛無將有人半奉十九よ都禮毛な久可
礼小之姓半なむわは後のとよ圓されり立代を

ふ國ひすととアヘテテ目ハ若よあうひくま
キミセの根をもれきくらはやうるいやうてかうつ
きれよきまほたあうひるむより今ハ枕ノセ
だるまのせれとほめなき代物也とすい例の事
トツメヒテニ事ヒツカレヒトツモサムシツク
御セドリアル御アモミセヨツムナリハおとナリと
シムニ同ニシナレハ併ニ面目御ヒツモモ其ガセ
強キヒツモカタナヒツモヒツモヒツモカタナヒ
ヒ侍

武藏國多摩郡國分寺村
本多羅軒家藏



ふ國ひすとをよそへてはいあよあひくま
きどせぬのねとれきくまめやそりつ
まれよままれまくあらわゆるより今ハ枕ノミ
だきのまのとれよまめなき代約也とくすい例のま
しよみとよ事とつめ仰とくすとせよゆく一の
頃也うらうれあむとせよみすへれとすと
つとんは向とをなれい傍よ面同仰とくすと甚わを
強きとよす方よたううばくひよなまく更よされ
の侍

武藏国多摩郡國分寺村
本多雖軒家藏



百首異見

